

国

語

〈受験学部〉

看護学部、農学部【理系科目型】

問題は100点満点で作成しています。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも文字数に含むものとする。(五五点)

装備に心を奪われていると、思考能力を失っていく。

「総理大臣の庇護」にせよ、「イージス・アショア」にせよ、「原子力発電所」にせよ、「米軍基地」にせよ、「ゲートッドコミュニティ」にせよ、いま思考能力を奪われていない人びとを苦しめ、気持ちを落ち込ませるものはみな、思考停止を促す重すぎる装備と、それによって実際に思考を停止しつつある人たちである。私は農業史研究者の端くれなので、昨今の気の滅入るニュースに接していると、農業の歴史も同じだなと感じる。

日本は「農業」の重装備に余念がないが、それはいまなお日本の生態系を大きく変えている。二〇一九年十一月一日付の科学雑誌『サイエンス』に産業技術総合研究所や東京大学の研究グループの論文がケイサイイされた。鳥根県の宍道湖でワカサギやウナギが激減している原因を探った記事である。それによると、一九九〇年代から利用が始まったネオニコチノイド系農薬によって魚の餌となる昆虫が激減し、収穫量が減った可能性がある、という。一九八二年には一平方メートルあたりに一、二匹いたユスリカが二〇一六年には一匹もいなくなった。宍道湖のワカサギの天ぷらをモリモリ食べて育った出雲人の私にはやはりショックな記事であった。

ここでは、こうした農業の重装備化を歴史的に振り返って、農業の軽装備化の不可能性と、あくは可能性について考えてみたい。

畜力は、つい最近までの人類エネルギー史の主役である。馬車はもちろん、農村での牽引力は馬、牛、ロバ、ラバなどであった。家畜はいろいろな使われ方をしている。

たとえば、棒の中心に穴を開け、そこに臼の回転軸を突き刺し、固定する。棒の片方の先端を牛

馬の背中にくりつけ、もう片方の先端は別の牛馬の背中にくりつける。二頭の牛馬がそれぞれ反対向きに円を描くように歩くと、その回転力を使って製粉したり、歯車に伝達させて納屋の機械を動かしたりできる。

畜力は家畜の筋肉から生まれる。筋肉を動かすエネルギーは飼料を食べて蓄える。飼料は植物だ。だから、太陽と土と水が必要である。しかも、家畜は糞尿を排泄する。糞尿は、貴重な肥料となる。欧米でそんな畜力をエネルギーの王位の座から引きずり落としたのが重装備社会の初期代表選手であった蒸気機関である。蒸気船や蒸気機関車、紡績工場や鉱山の動力など、蒸気機関の使用で飛躍的に生産性が上昇した。さらに、脱穀作業も機械化された。脱穀とは、収穫した穀物の束から穀粒を落としていく作業である。棒で叩いたり、千歯こきで削ぎ落としたり、古今東西いろいろな方法が用いられてきた。

西ドイツの映画『秋のミルク』（一九八八年）で、私はナチス政権下で脱穀機が使われるシーンをみたことがある。バイエルンの小さな農村で、何頭もの馬が牽引して持ってきた蒸気機関車と脱穀機を使い、村の衆みなどで脱穀する。ワンワン唸る脱穀機に、夫を戦地に奪われた女たちが次々と麦穂を持つてくる。轟音のなか麦わらが舞う光景は、なかなかの見所だった。脱穀作業が終わると収穫祭。その地方のナチの幹部が挨拶をし、その後ビールジョッキやらソーセイジやらが出てきて、どんちゃん騒ぎが繰り広げられる。

また、これも一九世紀から存在していたが、大きな農地の両端に蒸気機関車を設置して、双方の滑車に巻きつけてあるワイヤーを大型の犁に接続し、引っ張り合いをしながら耕す、という方法もみられた。ただし、大掛かりな機械なので、大土地所有者しか導入できなかった。ドイツの野外民俗博物館に行くと、かなりの割合で、農業に用いられた蒸気機関車が動態保存されていた。

蒸気機関の燃料は、石炭である。蒸気船や一般輸送用の蒸気機関車ほどの量ではないが、農業のエネルギーとしても石炭は不可欠であった。

石炭は、かつての植物の死骸が地熱と微生物の力で何千万年もかけて分解され、土の圧力で圧縮され石化したものである。つまり、エネルギー革命と大仰に言われるわりには、相変わらず私たちは植物の光合成の力を借りたエネルギーを使っているにすぎない。

蒸気機関は、水を沸騰させて蒸気を発生させ、タービンを回す、という機関である。だが、出力まで時間がかかり、重く、小回りがきかない。運搬費用もかかり、爆発のリスクもある。それを克服すべく生み出されたのが内燃機関だ。コンパクトで持ち運びやすく、動力も大きい。内燃機関が自動車や自動二輪車、そして飛行機に積まれることによって、その性能は飛躍的に向上した。

私が一年暮らしたことがあるドイツの工業都市シュトゥットガルトは、メルセデスIIベンツの企業城下町である。中心からそれほど離れていないところにはメルセデスIIベンツ博物館があり、いつも活況を呈している。ここで興味深かったのは、近未来的な展示室でひときわ土臭さをアピール

するベッツ製のトラクターだ。近くに興味深い写真が展示してあった。トラクターから動力を引き出し、それをベルトで脱穀機に接続して動かす風景をサツエイしたものだ。このように、トラクターは、単に牛馬に代わって農地を耕したり、収穫物や牧草や堆肥を運んだりするだけではなく、納屋の近くに持ってきて、脱穀などの動力源に用いることができた。

ただ、トラクターは糞尿を生産できない。肥料は市場で購入せざるを得なくなる。ペルー近海の無人島のグアノ（海鳥の糞が化石化したもの）や、チリの山に眠っていた硝石などが、蒸気船によって欧米に運ばれてくることで、なんとか肥料を確保したのである。

二〇〇五年のFAOの統計で日本の単位農地面積あたりのトラクターの数は世界一である。北海道の一部の広い土地をのぞき、狭い土地に小さなトラクターを大量に導入してきた国家であることに、私たちはもっと自覚的にならなくてはならない。

なぜなら、燃料は石油だからである。内燃機関が登場して以降、農業は石油なしには営めない。コンバインという今は欠かせない機械は、脱穀と稲刈り機能とを結合させたものだ。かつては太陽熱を用いた天日干しも石油を用いた機械乾燥に移行した。石油は動力としてだけではなく、促成栽培のための暖房の燃料や、ビニールハウスや肥料袋の原料や、化学肥料や農薬の原料としても用いられている。納屋には石油発電機があった農家も多いだろう。内燃機関がコンパクトになっただけ、その数は飛躍的に増えた。

二十世紀初頭に開発されたハーバー・ボッシュ法は、空気中の窒素を原料として窒素肥料を量産できるものだが、膨大なエネルギーを必要とする。1、エネルギー革命中にも畜力は使用されたし、いまなお石炭は化学肥料の重要な原料なので、畜力、石炭、そして石油へという図式はやや単純すぎるにせよ、石油依存型農業は、二十世紀農業の別名であることは否定できない。そしてこれまた言うまでもなく、石油もまた、プランクトンなどの生きものの死骸が地熱と微生物の力で何千万年もかけて分解されたものである。

基本的には農業は太陽と雨と土壌があれば営める仕事なのだが、重装備によって化石燃料に強く依存する産業になった。重装備農業はたしかに、膨大な量の農作物を膨大な人間に供給したが、未^c来の資源をハイシヤクする以上、世代倫理的な罪は重い。

トラクター、コンバイン、化学肥料、農薬、大規模灌漑、農業用水路の建設、そして石油の掘削。重装備農業には、大きな資本と、大きな企業と、大きな重機が必要である。アメリカで何十台も連なって小麦を刈るコンバインの群れや、ブラジルの地平線まで広がる大豆畑の写真を見ていると、もはや重装備農業を捨てるのは不可能とさえ言えそうだ。さらにいまでは、「スマート農業」の掛け声のもと、筋力を補助するパワースーツ、農薬を散布するドローンも入ってきているから、SF映画のようだ。この最終目標は、ボタンでピッとやる農業の全自動化だろう。

けれども、ここで立ち止まりたい。そもそも農業は、ガシャガシャ音を立てる中世の騎士のよう

に重装備でなければならぬのか。重装備は資金の少ない農民に借金を強いていないか。そのメーカーによる全自動借金製造機となっていないか。

もう一度、原点に戻ろう。

太陽と水と土。農業に必要な三つの条件は、地球に住む万人に無償で与えられていたはずのものだ。農業用水の維持費は見逃せないが、基本的には安価であるべきだ。土地は商品になってしまったが、他方で日本では耕作放棄地が増えている。その面積なんと四〇万ヘクタール、つまり、四〇〇〇平方キロメートルである。正方形で考えると一辺約六三キロメートル。ちなみに、一人の人間を一年間食べさせるのに必要な面積はそんなに大きくない。大人一人一年で六〇キログラムのコメを食べるとして、コメだけで考えると大人一人一三平方メートル、つまり一辺約一〇・六メートルの正方形である。つまり、日本全国の耕作放棄地を全部使えば、約三五〇〇万人分のコメを生産することができる（言うまでもないが、現在使用中の約四〇〇万ヘクタールの農地は計算に入れない）。

一人の大人が一年に必要なコメを生産するためには、一辺約一一メートルの正方形があればよい、ということは何を意味するだろうか。たとえ、野菜を作るためにこの二倍の面積が必要だとしても、小さな歩行型トラクターが一台あれば、もしくは共有でトラクターを用いれば、化学肥料も、農薬も、乾燥機も、脱穀機も必要ないぐらいの小ささである。そして、なんといってもエネルギー消費量が格段に少ない。

石油の使用による地球温暖化と海面上昇の影響も叫ばれる中、石油に依存しない農業が緊急に求められている。石油が枯渇する、食料輸入が減少する、特定の品種を攻撃する病害虫やウイルスが広まる、穀倉地帯の天候不順で穀物生産量が急減する、放射性物質による汚染で土壌が使えなくなるなど、食料に関わる危機の要素も、私たちの周りにたくさん転がっている。

そんな中で「食う」ためのもっとも合理的かつ安全なことは、食糧危機の時に役立つお金を稼ぐことではなく、実のところ、みんなが自分の食べる分だけ耕すことである。地球環境問題を解決するには、実は、全人類が、ジムでモルモットのように走る代わりに、自分が食べるだけの軽装備の農業を営んで体を鍛え、農閑期に仕事をしたり、自分の読書や音楽などのシユミに時間を割いたりすることである。

以上の妄想は、「昔はよかった」という類いの懐メロ的ロマン主義に浸るためではない。私は悲観主義者だ。国民がみなパートタイム農民になる法律ができれば、食料自給率の問題と環境問題はかなりの部分解決できるが、職業選択の自由が原則である近代社会ではそれは基本的人権の侵害になってしまう。食料供給の安心感から出生率も増えそうだし、耕作放棄地も減るので、こうした世界には惹かれるものがあるが、目指すことは難しい。2、私たちは、裏庭で自分が食べる分だけの農業をして、あとは好きなことをする、という歴史を私たちの祖先が発達させることがで

きなかったり、魅力的だと思わなくなったりした事実を舌打ちしながら肅々と受け止めることしかできない。

ただし、ここで舌打ちすることと思考を停止することとは別だ。「次善策」^Dを考えてはならないという法律はどこにもない。

昨年、ドイツの環境NGOが二〇一八年の異常気象の最大の被害国として、日本を第一位に選んだことは、日本本国でほとんど騒がれていない。いまのところ異常気象の原因ではないかと国際社会で議論されており、しかも日本列島からはその資源を得ることがほとんどできない化石燃料に依存する農業を段階的に軽装備化していくことは、日本の政権からは提案されない。

しかし、そんな日本ならば、小規模軽装備農業を新産業として整備し、軽装備農業の世界の先端を走ること、気候変動という共通かつ喫緊の課題に直面する国際社会で名誉ある地位を占めることを望む方が、理にかなっている。そしてパートタイム農業を強制するのではなく、優遇する法整備は可能である。条件は軽装備農業を営むこと。成長主義に疲れた若者たちが生きていくための受け皿にもなるだろう。

イギリス・アシヨアにせよ、オスプレイにせよ、日本は膨大な兵器を外国の企業から購入して、防衛の重装備化に余念がないが、その結果膨れ上がるのは、来たるべき日本の外交を考える思考力ではなく、単に国家の借金と私たちの税金と他国とのギスギス感である。同様に、日本農業の重装備化も農家の借金を増やし、オルタナティブな道を考える行政や農家の思考力を減退させている。

もはや、万人に平等に降り注ぐ資源である「太陽光」と「太陽熱」を最大限利用した農業を進めるのが、資源の少ない国の選ぶ道だろう。3、農業という産業は、土壌と種子があれば誰でも始めることができる。

重装備とは、人間の臆病さのあらわれである。しかも、方向転換をしにくくし、思考をコウチョク化させる。重すぎる鎧を脱ぎ捨てたとき、身体のみならず、思考もまた軽やかに羽ばたき始めるだろう。

（藤原辰史「重装備社会の農業」）

問一 点線部 a～e のカタカナを漢字にそれぞれ直しなさい。

問二 波線部 i・ii の本文中の言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

i 余念がない

ii あわよくば

- ア 余計な考えを振り払うこと
イ 考えもなく突き進むこと
ウ 一つのこと熱中すること
エ 邪念がなく専心すること
- ア 邪魔さえなければ
イ 許されるのならば
ウ 運命に左右されなければ
エ 都合よくいけば

問三

空欄

1

3

に当てはまる最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- 1 ア それでも 2 ア ちなみに 3 ア それでも
イ ましてや イ さらに イ からも
ウ もちろん ウ それでも ウ さいわい
エ もしくは エ だから エ こうして

問四

傍線部 A「重装備社会の初期代表選手であった蒸気機関」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 蒸気機関の使用により、従来穀物の束から手作業で穀粒を落としていた脱穀作業が機械化され、省力化が可能となった。
- イ 蒸気機関は農業の生産性を上昇させたが、当初は大掛かりな機関車を導入するのは大土地所有者にしかできなかった。
- ウ 蒸気船や蒸気機関車、紡績工場や鉱山の動力など、蒸気機関の使用で効率的かつ安全なエネルギー革命を実現させた。
- エ 蒸気機関の燃料は石炭であり、植物の光合成の力に頼る点で、飼料となる植物を必要とする家畜の使用と共通していた。
- オ 蒸気機関は沸騰水から蒸気を発生させなければ機能しないため、出力まで時間がかかる上に重く運搬に不向きであった。

問五 傍線部B「それを克服すべく生み出されたのが内燃機関だ」とあるが、内燃機関が農業に利用されるようになったことで生じた変化について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア トラクターが普及し、農耕や運搬に活用されたばかりか、動力源ともなり脱穀機に接続されて役立てられた。

イ 日本のような狭い土地でも小回りの利く小型トラクターが大量に導入され、石油なしには営めなくなった。

ウ 脱穀と稲刈り機能を結合させたコンバインや、コンパクトな内燃機関を活かした発電機が農家に導入された。

エ 内燃機関は家畜のように肥料となる糞尿をもたらし続けてくれないため、肥料を遠隔地から確保しなければならなくなった。

オ 内燃機関は燃料として膨大な量の石油を必要とするため、同時に畜力と蒸気機関も併用される必要が生じた。

問六 傍線部C「そもそも農業は、ガシヤガシヤ音を立てる中世の騎士のように重装備でなければならぬのか」とあるが、重装備農業がもたらす事態について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア メーカーが買わせる高価な重機のために小規模農家が借金苦に陥る状況を生んでいる。

イ 農業生産量を増大させたが、地球上の限りある化石燃料を使い果たすことにつながる。

ウ 大きな資本や大きな重機を用いる農業によって、膨大な量の農作物の収穫が可能になる。

エ 石油に依存する農業は地球温暖化を促し、食糧危機を招くことになる。

オ 合理的な農業を追求する結果、食糧危機の時に役立たないお金を稼ぐことから解放される。

問七 傍線部D「次善策」を考えてはならないという法律はどこにもない」とあるが、日本の農業のための「次善策」とはどうすることであると筆者は述べているか。本文中の言葉を用いて六十字以内で答えなさい。

問八 二重傍線部「装備に心を奪われていると、思考能力を失っていく」ことを、日本の農業において言い表した一文を本文中から抜き出し、始めの五文字を抜き出しなさい。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

人類と病の関わりについては、多くの研究があり、一つの独立した研究領域となっている。とくに歴史的、社会的な影響が大きな疫病については、歴史家の関心を引いてきた。その代表的な例が、一四世紀にヨーロッパ中で猛威をふるった黒死病である。地域差はあるものの、人口の三分の一から半分が失われるといった圧倒的な被害が極端な人手不足をもたらし、労働力確保の必要から西欧での農奴制に終止符が打たれた、といった歴史の教科書の必須条項から、ボツカチオの『デカメロン』の舞台装置となったなど、多方面に深刻な影響を残した。イングランドの場合、一四世紀初めに四〇〇万人(もっと多いという説もある)あった人口が、世紀末には半分となり、元の水準に戻るのは一七世紀であった。この回復には一六世紀の人口増が貢献しているが、二〇〇年という時間を要したわけである。

^A ペストは、ネズミに寄生するノミによって媒介され、発症すると耳の後ろに吹き出物が出たり、腋^{わき}などのリンパ節の腫^はれが見られたりする。ときに敗血症によって、全身に出血斑^{はん}が現れ、壊死^{えし}によって皮膚が黒化する。黒死病と呼ばれる理由である。ただ、ペストすなわち黒死病と理解されることが多いが、ペストとはもともとは疫病一般を指す言葉で、記録にペストとあっても、かならずしも同一の病気とは限らないし、今日のペストと同じ病気と即断もできない。

i、ポールの小説『赤死病の仮面』の「赤死病」とは架空の病気らしいが、エボラ出血熱といった新来の病気を予見しているようで、小説の内容以上に恐ろしい。ポーの小説には死の恐怖を扱ったものが多い。生きながらの埋葬を扱った『アッシャー家の崩壊』や『早すぎた埋葬』しかり、スペイン異端審問での死の拷問を描いた『落とし穴と振り子』しかり。いずれも息がつかまるような極限状態が描かれるが、病気という目に見えない脅威を描いた『赤死病の仮面』は、今日でもリアルである。

当時の人びとに「疫病、ペスト」と目された病気の流行は、一四世紀だけではなく、それ以前にも、それ以降にも、頻繁に生じていた。エリザベス時代には、くり返し記録があり、シェイクスピアなどが活躍したロンドンの劇場は、疫病の被害が広がるのを防ぐために夏場には休業するのが普通であったし、実際に流行してしまうと閉鎖となった。そういうときには地方巡業に出るのだが、感染を恐れて、そういった旅回りの劇団の入市を拒否する都市も多かった。疫病の流行がくり返されたのは、地方都市も事情は同じで、北部の中心都市ヨークなどでも、夏場の祝祭で上演された大規模な市民主体の聖史劇が、一六世紀にも頻繁に中止されている。

そういったなかでも、王政復古間もない一六六五年にロンドンを襲ったペストの流行は、歴史上よく知られたものである。ロンドンのペスト流行についての「記録」としては、ダニエル・デフォーの『疫病流行記』(一七二二年)がよく知られているが、ペスト流行時にはデフォーはまだ

子どもであったので、この作品は、実見録というよりは、いかにもデフォーらしい「ノンフィクション」と創作のハイブリッド」ともいえる。この流行では、毎日一〇〇〇人以上の死亡者が出て、ロンドンの人口の一五パーセントに当たる七万人が命を落としている。ただし、ロンドンでのペストの流行は、一六六五年以前にもくり返されており、一七世紀だけでも、一六〇三年、一六二五年、一六四〇年に流行している。

一六六五年の流行の際、病気はカトリック教徒による陰謀であるとか、ユダヤ人が毒を撒いたといった流言が飛び交っている。一九二三年の関東大震災の際に、朝鮮人が襲ってくる、毒を井戸に入れた、といったデマが流れ、日本人の自警団などによって多くの朝鮮半島出身の人びとが殺されたのとよく似た話であるが、こうしたデマが信じられる構造も共通したものであるだろう。つねに自分たちが差別し迫害している存在であるので、その恨みが噴き出すに違いない、こうした混乱のなかで、きつと復讐されるに違いない、といった後ろめたさの裏返しであり、近世の魔女狩りともよく似た発想ともいえる。

近代になって、病気の原因が科学的に解明されるようになると、中近世のような偏見にもとづく弱者攻撃は鳴りをひそめた、と考える研究者もいる。ただし、この変化を強調しすぎるのも問題かもしれない。科学的知識の広まりによって、かならずしも弱者への差別や偏見がなくなったわけではない。ii、一見科学的な装いのもとに弱者攻撃がなされることもある。たとえば、一九

世紀末から二〇世紀にかけて、アメリカ合衆国で天然痘が流行した際、黒人の患者やその家族が、「感染を予防するため」という口実で白人によって襲われ、銃で撃たれることもあった。罹患者が近づいてくるのを防ぐために暴力に訴えたわけである。また、二〇〇九年に日本で新型インフルエンザが流行した際、神戸・大阪の高校生の感染が確認されると、各地で関西圏の高校生というだけで恐れられ、修学旅行生が忌避されるといった、一種のパニック状態になったことは記憶に新しい。^Cペストへの対処法としては、隔離が有効であることは、古くから認識されていた。中世の黒死病流行の際、地中海の港町などでは、患者のいる可能性のある船舶を四〇日間、入港させずに様子を見た。この四〇日間を意味するイタリア語（ヴェネチア方言）が、検疫のための隔離を意味する英語 *quarantine* の語源となっている。ロンドンの流行時も、ペストを出した家は四〇日間閉鎖され扉にはその印が大書された。家人は外へ出ることは許されなかったので、当然、患者と一緒にいることになる。感染してしまう確率が高くなるのだが、病気が広がるのを防ぐことが優先されたのである。

患者を隔離するのとは逆に、自分たちが町を逃れて田舎の屋敷内に閉じこもるといのは、ボツカチオの『デカメロン』の設定である。デカメロンとは「一〇日間」を意味し、ペストの蔓延するフィレンツェを逃れ、近郊の村に避難した一〇人の男女が、暇をもてあまして、退屈しのぎに、二週間の間に、日曜などを除く（退屈とはいえ、安息日は守っているわけである）一〇日間、毎日一

人が一話ずつ話をしてゆき、一〇〇話の話が集まった、というわけである。この複数の登場人物が順に話をするという枠物語（『千夜一夜物語』のように、大きな物語の設定のなかに、個別の短篇が配置されるもの）の設定は、カンタベリ巡礼の一行が順次話をしてゆくというチョーサーの『カンタベリ物語』にも受け継がれているのだが、残念ながら『カンタベリ物語』は未完に終わっている。

ロンドンのペスト流行時にも、上流階級や富裕層を中心に、人口の半分がロンドンから退避したとされる。ただ、病気を避けて町を逃げ出すという手段は、有効なはずだが、逃げ出した人間がすでに病気に冒されている場合は、避難所に病気を持ち込むわけで、ポーの『赤死病の仮面』の世界を彷彿とさせる悲劇が待っていることにもなる。ロンドンのペスト流行の際に作られた木版画などに、避難しようとする人びとを死が追いかけてくる様子を描いたものもあるので、あながち杞憂²ともいえなかったのだろう。

一方、こうした避難が生み出した素晴らしい成果もある。ロンドンでペストが蔓延した一六六五年、ケンブリッジ大学も閉鎖され、教員・学生は故郷に戻るようになった。そんななかで奨学生に採用されていた若き日のアイザック・ニュートン（一六四二年生まれ）もいた。故郷ウールズソープでの一年半もの「休暇」の間に、万有引力の法則をはじめとする、彼の重要な業績が生み出されている。リングが木から落ちるのを見て万有引力の法則を発想した、という有名な逸話は、このときのことであるが、一八世紀、ニュートンの晩年になってから登場するエピソードで、その真偽については明らかではない。リングの木があれば誰でも大発見できるわけではないが、研究にはそれなりの時間的余裕が必要なのは、今日の学問の世界（大学の研究環境）の雑事の多さを思うと、学術発展のためにもっと顧みられてもいいことだろう。

では、逃げ回るのではなく、病気そのものを予防・撃退する方法は考えられなかったのだろうか。中世の黒死病であれば、疫病は神が下された罰である、という理解から、罪の許しを請うために自らの身体を鞭打つ「鞭打ち苦行者」の集団がヨーロッパ各地で見られた。黒死病の流行を背景にしたI・ベルイマンの映画『第七の封印』（一九五七年）でも、その様子が描かれている。自らの罪を反省するだけならともかく、各地の鞭打ち苦行団は罪のあがないとしてユダヤ人攻撃に向かい、多くのユダヤ人が虐殺されてしまうという悲劇を生み出すことになる。やはりスケープゴート³が求められたのである。

一七世紀ロンドンのペスト流行の際も、カトリック教徒やユダヤ人に不審の目が向けられたが、さすがに神の怒りに帰するというよりは、より科学的な対応が前面に出ている。まず、病気流行の兆候をいち早く察知するためにおこなわれていたのが、一週間ごとに死亡者の数を調べ上げ、「死亡表」として刊行することであった。死亡表は一年分をまとめても刊行された。こうした継続的な統計から、死亡数の不自然な増加があれば、それは何らかの疫病によるものと判断し、できるだけ

早く対策をとるといふものである。

早期の対応はそれなりに効果はあったと思われるが、いかんせん、病氣そのものについての知識はまだまだ未熟であった。ただ、中世以来の天体の運行や体液説によって病氣を説明する考えが根強く残っているなか、感染症が何らかの病原体によって引き起こされる、という考えも広まっていた。もともとは、中世のイスラム世界で提唱され、ルネサンス期にイスラム医学の知識がヨーロッパに伝えられたもので、一六世紀には受け入れる学者も増えていた。ただし、実際に病原体が確認され、証明されるのは、一九世紀になってパスツールやコッホの研究からである。それまでは、病氣の元になるものが身体の外部にあるにしても、どういった形で存在するのか、さまざまに議論された。

近世以降、支持者が多かったのが、疫病は気体の形を取る「ミアズマ（瘴気^{しやうき}）」が原因という考えである。よほど湖沼などから毒を含んだ気体が発生する、といったイメージである。空気が汚染されているという理解なので、匂いで予防したり、火で浄化することができるとではないか、とも考えられた。具体的には、ハーブの香りをかぐことで感染を防げると考えられた。近世のペスト流行の際に患者の対応にあたった人びとは、不思議な鳥のようなクチバシのついた防護服を着用したのだが、クチバシ部にはハーブが仕込まれていたのである。火での浄化については、通りのあちこちで盛大に篝火^{かがりび}を焚^たいて空気を清浄にしようとした。

^E これらを無知にもとづく迷信として笑うことはできないだろう。見えない恐怖に対して人びとが平常心を保つことがむずかしいことは、福島原発事故を思い起こせば、容易に想像できる。あつとき、われわれは、不安と恐れの中かで、見当違いな生け贄^{なげ}を求め、捧げなかつたと断言できるだろうか。そして、入り乱れるさまざまな情報とその解説の多さ。ある者は黒といい、ある者は白という混沌。さらに、現実逃げざるをえなかつた多くの人びとの悲しみと憤り。それに追い打ちをかけるようなさまざまな言説。いつか歴史的に検証されるとき、その実態と背景や影響が、政治的な思惑を超えた形で明らかにされることを願いたい。

（指昭博『キリスト教と死』）

問一 波線部1～3の本文中における言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | |
|----------------|-----------|------------|
| 1 彷彿とさせる | 2 杞憂 | 3 スケープゴート |
| ア ありありと思ひ浮かばせる | ア ありえないこと | ア 鬱積を晴らすもの |
| イ あれこれと思ひ悩ませる | イ 一時的な気休め | イ 秩序を破壊する者 |
| ウ ふらふらとさまよわせる | ウ 個人的な悩み | ウ まじないの御守り |
| エ ぼんやりと思ひ出させる | エ 無用の心配 | エ 身代わりとなる人 |

問二 空欄

i

ii

に当てはまる最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|------|----|---|-------|
| i | ア | そのため | ii | ア | ただ |
| | イ | たしかに | | イ | むしろ |
| | ウ | ちなみに | | ウ | とはいえ |
| | エ | ところが | | エ | それなのに |

問三 傍線部A「ペスト」の流行について述べた次のア～エのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 一四世紀にヨーロッパで大流行し、イングランドでは同世紀の間に人口が半減した。
- イ エリザベス時代のロンドンの劇場は、疫病を恐れて夏場に休業するのが普通であった。
- ウ エリザベス時代の地方都市では、感染を恐れて旅回りの劇団を拒否することがあった。
- エ 一七世紀のロンドンでは、たび重なる流行により人口が一五パーセントも減少した。
- オ 一六六五年のロンドンの流行は、カトリック教徒による陰謀であるとのうわさが広まった。

問四 傍線部B「偏見にもとづく弱者攻撃」とあるが、筆者はなぜこのような弱者攻撃がなされると考えているか。本文中の言葉を用いて五十字以内で答えなさい。

問五 傍線部C「ペストへの対処法」とあるが、このうち隔離と避難に関わる事柄を述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 地中海では感染者が乗船しているおそれのある船舶は、四〇日間入港を禁止された。
- イ ロンドンでは感染者の家の扉に印が付けられ、家族も患者とともに隔離された。
- ウ ペストを逃れた人々が順に百の話物語る『デカメロン』がボッカチオによって著された。
- エ ロンドンでは病気に冒されている者が避難所に隔離されたために、感染が拡大した。
- オ 大学の閉鎖により故郷に帰ったニュートンは、休暇中に万有引力の法則を発見した。

問六 傍線部D「病気そのものを予防・撃退する方法」とあるが、予防と撃退に関わる事柄を述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 中世には疫病を罰として捉え、自分の身体を鞭打つことで許しを請おうとする集団が各地に現れた。

イ 一七世紀のロンドンでは毎週の死亡者数を調べて統計を取ることで、疫病が流行する兆候を見出そうとした。

ウ 一七世紀には天体の運行などを疫病の原因とする中世以来の考えも残る一方で、感染の原因となる病原体も発見された。

エ 近世には、疫病の原因となる物質により空気が汚染されているので、火で浄化することができるとの考えもあった。

オ 近世には、感染を防ぐことができると信じて、ハーブを仕込んだ防護服を着用して治療に当たることもなされた。

問七 傍線部E「これらを無知にもとづく迷信として笑うことはできない」のはなぜか。本文中の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。